

特集

「授業びらき」の工夫

いよいよ新学期。生徒たちは期待に胸をふくらませていることでしょう。その気持ちに伝えるために、どのような「授業びらき」をしたらよいのでしょうか。本特集では、三人の先生方に、それぞれの工夫をご紹介いただき、高木まさき先生に授業びらきの大切さについて、ご提言をいただきました。

提言

最初にこそ手をかけよう

国語の学習への期待感をもたせる

中学生になると「なぜ国語を学習するのだろう」と思ったり、「国語を学ぶことに意味があるのだろうか」と懐疑的になったり、さまざまな気持ちをもつ生徒が出てきます。授業びらきでは、生徒の知的好奇心をくすぐりながら、国語を学ぶ意味を考えさせたり、国語の奥深さを感じ取らせたりして、この一年間の学習に向きあう気持ちをもたせてあげたいものです。

本特集では、三名の先生方の実践を紹介しています。宗我部先生（P6-9）は、国語の根源ともいえる、声や言葉を取り上げ、国語のおもしろさや奥深さを体感させる授業をしています。また、堀江先生（P10-13）は、自作のプリントを使いながら、国語の学習への思いを生徒へ伝えていきます。鈴野先生（P14-15）は、国語を学ぶ意味について生徒へ真剣に語りかけています。このように、授業びらきで国語を学習する意味を魅力的に伝えられたら、生徒たちは

これからの授業に、期待感をもつようになるでしょう。

また、最初の授業では、生徒たちが少し緊張しているので、宗我部先生や堀江先生の実践にもあるように、声を出す場面を取り入れるとよいかもしれません。緊張を解きほぐして、教室によい雰囲気をつくることも大事です。

授業のルールを教える

授業びらきでは、授業の中でのルールについても、きちっと指導していく必要があります。ルールというときと堅苦しく思われがちですが、最低限のルールを守ることで、豊かな話し合いができたり、自分の考えを深めたりすることができたり、話し合いや発表のルール、ノートの取り方などは、早い時期に丁寧に指導しておくべきでしょう。宗我部先生が「ノート指導はすればするほど、国語の力がつく」と話されていますが、私もノート指導は特に大事だと思って

います。ノートはただ板書を写すだけでなく、友達の意見をメモしたり、自分の考えを書き留めたりすることで、書く力に加え、メモ力や思考力など、国語の総合的な力を養うことができます。それにノートは、生徒の学びに関する貴重な情報源になります。生徒が気持ちを新たにすると、一学期に、ノートをしっかり見て指導してあげてほしいなと思います。

学期初めは、何かと忙しいものですが、丁寧に授業びらきを行えば、その後がずいぶん楽になってくると思います。労を惜しまず、最初にこそ手をかけて、生徒たちと向き合っていたいだきたいと思います。（談）

高木まさき

静岡県生まれ。横浜国立大学教授。中央教育審議会国語専門部会委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）、『合科的・総合的な学習のための読書関連単元100のプラン集』（共編著 東洋館出版社）など。光村図書の小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。